# 「道民目線」とは

鈴木直道知事が、カジノを含む統合型リゾート施設（ＩＲ）の道内誘致について、二〇二一年七月までの国への認定申請を断念する方針を表明した。報道機関の世論調査で道民の半数以上が反対していた側面では、知事がかねてから訴えていた「道民目線」で判断したように見えるが、その決定過程を振り返ると、その目線は道民に向いていたかどうか疑わしい。

「熟慮に熟慮を重ねた結果、誘致に挑戦させていただきたいとの思いに至りました。しかしながら、豊かな自然に囲まれた候補地は、希少な動植物が生息する可能性が高く、区域認定までの限られた期間で、環境への適切な配慮を行うことは不可能であると判断を致しました」

一一月二九日の道議会一般質問で知事はこう述べ、優先候補地としていた苫小牧市植苗地区のＩＲ構想の断念を表明した。その一方で、「交流人口や観光消費の増加はもとより、民間投資や域内需要の拡大など、幅広い効果が期待されます」「本道全体の経済社会に大きなインパクトをもたらし、持続的な発展に寄与するプロジェクトであると考えております」とＩＲのメリットを強調。引き続き誘致を検討する考えを示した。

知事が断念を決めた最大の理由は、植苗地区の自然環境だ。オオタカなどの希少生物が確認されている上、環境影響評価（アセスメント）などの手続きに通常三年程度かかるとされるため、国への申請期間に間に合わないと判断した。「環境アセスが終わる前でも国に申請できる」と主張する関係者もいたが、道議から「誘致表明して四億円もの調査費を付けた後、アセスでＩＲができないとなれば、そのお金はすべて無駄になる」との指摘もあった。

ＩＲの道内誘致を巡り、知事は今春の知事選で「道民目線を大切に判断する」と公約に掲げた。その言葉に沿って、無作為抽出した道民を集めたグループインタビュー、道内六市での地域説明会などを実施。これらの参加者と郵送での意向調査では、地域説明会の参加者はＩＲへの期待度が不安度を上回ったが、グループインタビュー参加者と郵送調査は三分の二が「不安」「どちらかと言えば不安」と回答した。

知事は「地元の意向」も誘致の判断材料に掲げ、苫小牧市議会はこれに応える形で、市議二八人のうち有志一六人が岩倉博文市長にＩＲ誘致推進を求める要望書を提出。しかし、道側はこれで満足せずに水面下で、誘致推進を求める市議会決議を求めた。「道としてＩＲ誘致を決めても、苫小牧で関連予算案が通らなければ、前に進められなくなる」と危惧したためだ。苫小牧市議らは「議会に介入しようとする越権行為だ」と反発したが、一〇月二八日、全会一致を原則としていた決議を賛成多数で可決した。

「道議会での議論や、住民の代表である議員がどのような考えを持っているかは、大変重要だ」。知事は同三一日の記者会見でＩＲ誘致の判断についてこう述べ、最大会派の自民党・道民会議の動向を注視する姿勢を示した。今春の統一地方選で自民党道連はＩＲ誘致推進を掲げたが、反対を明言する自民道議も複数いたからだ。自民会派は一一月に入ってからＩＲについて実質的に協議したが、道路や水道などインフラ整備に要する費用、国が求めるＩＲ施設要件の過大さなどに対する疑問の声が相次ぎ、道幹部が答えに窮する場面も。最後に、環境アセス問題が急浮上。「判断できる状況にない」とさじを投げる自民道議もいた。結局、自民会派はまとまらず、誘致見送りの流れが決まった。

知事の判断は、「道民目線」から地元の意向、そして道議へと揺れ動き、最後は推進派にも反対派にも批判されないよう、「誘致を見送り」ながら「挑戦する」というあいまいな姿勢に落ち着いたように見える。知事はＩＲ見送りについて道民に「しっかりと説明したい」としている。「道民目線」とは何だったのか、しっかりと説明してほしい。

＜魚＞